
とある天才の幼馴染

紅猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある天才の幼馴染

【NZコード】

N51860

【作者名】

紅猫

【あらすじ】

上条当麻には小さい頃から1人の幼馴染がいた。とある理由で外国に滞在したが彼女と再会するとき、物語が始まる!・時間軸は11巻後です。基本、原作沿い+オリジナルで話が展開します。

プロローグ

8月1日 PM 10:35

現在位置アフリカにある小さな村一。

人工による光がなく星がきらきらと瞬いている。

1人の日本人女性が星を眺めながら小さくつぶやく。

「…会いに行くから…」

「…」れで終わりなんてさせない…」

さうして拳を強く握りながら…

「君は絶対に俺たちが守る…！」

「絶対に…絶対に終わりなんかさせない…！」

ギリっと歯を噛み怒りを込めて遠くにいる相手に恨みがましく…

「アレイスター…！…！」

そして手には幼い子ども2人が楽しそうに笑っている写真が握られていて女性はそれを見る。

1人は女性のもの…

もう一人はー…

「…うめ…」

切なく、儚く、つぶやいて
その言葉は風に乗せて、空に流れー…。

プロローグ（後書き）

『とある天才の幼馴染』が始まりました！
とあるを読んでからずっと頭の中にはついて、話が進むにつれて膨らんでいきました。

この物語をずっと胸の内に留まつていきたかったのですが、もうキリがつけられなくなつたというか…いつそ吐き出した方が楽だろつと思つて書きだしました；；
とある天才の幼馴染をどうかよろしくお願ひします。

突然現れた幼馴染（前書き）

注意

- ・当麻とオリキャラ（聖）は何故か妖しい空気も出しますが、あくまでもふざけ合いなので幼馴染であり友人以上の関係はなりえません。
- ・オリキャラ（聖）は女性です。1人称が俺だけど女性です。以上のこと踏まえてお読みください。

突然現れた幼馴染

1人の女性が学園都市の入り口の近くに立っている。

なにしろ先日まで外国にいたのだ。

今日、日本に到着し、学園都市で勉学するためここまで足を運んだのだ。

「やつと着いたか…。相変わらず広いなー、ここは。」

疲れた様子を見せるが、表情は非常に晴れやかな顔をしている。
まるでこれから未来を楽しむかのように。

彼女は勉学するためだけに学園都市に来たわけではない。

ただ勉学するならどここの場所だってできる。

彼女が学園都市を選んだのは彼が学園都市にいるからである。

「元気してるかなー、当麻は。」

第1章 突然現れた幼馴染

「うだー、今日も疲れたー…。」

1人の少年・上条当麻は帰りの帰路を辿っている。

今日はテスト週間のため早めに授業を終えており、現在の時刻は昼に近い。

今の季節は秋の間近だがまだ夏の名残りが残っている。

大覇星祭の2週間後だ。

まあその前にクジで当たったイギリス旅行券を使ってインデックスと行つたわけだが……。

なんかゴタゴタに巻き込まれて大怪我を負つてちつとも身体が休まらなかつた。

「不幸だ……。」

いつもの口癖をつぶやきながら今日の晩御飯を考える。
外食もいいのだが、少しでも節約したい彼にとつてはそちらの選択はしない。

それに彼の同居人はかなりの食量を食べるので金のかかる外食は控えている。

彼の同居人の名はインデックス。

イギリス静教・ネセサリウスに属し、1万3千冊の魔導書を記憶している「歩く魔術図書館」と呼ばれている少女だ。

見た目は14歳に見えるが実年齢が分からぬ完全記憶能力の持ち主だが、魔術は使えない。

それは魔導書を使われる危険から遠ざけるためにネセサリウスがそういうふうに施したのだ。

彼女につけられた首輪と称する「ヨハネのペン」もそのためである。

しかしそれを破壊した当麻はその記憶はなかつた。

彼女を助けるためにドラゴンブレスから出てきた羽が彼の頭に直撃し、エピソードつまり思い出や過去のことを全て忘れてしまつたのだ。

優しい彼は少女を傷つけないために笑顔を失わせないために……
その事実を自らの手で……
覆い隠した……。

（インテックスには匂い飯を用意してゐるからなー。どうか行って暇でも潰すか。）

「だから離せないんだよーー。」

「ーー。」

かなり大きい声をして呟ばられてひっくり返りそうになつた。いや、問題は叫んでいた声が女性らしきものだつた。

叫んでいた方向を改めて向き直すとそこには不良たちにかこまれて完璧に見えはしなかつたが確かにその中心には女性がいた。

「おこおこ女がそんなでかい声出すもんじゃねーだろ。」

「お前らが出来切るんだろーがーー。」

（…もつともだ…）

呑気にそんなことを考えてしまつたが、そんなことしてこの場合じやない。

どつやらあの不良たちは彼女に對して不埒なことでもしきつとこるるのが明白だ。

実際に奴らの目がすんごくやらしく。

「どつあえずそこをビナーーお前らが相手してゐる暇は微塵もねえんだよーー。」

「てめえがおとなしく俺らに付いてくつやいにつけんでんだけ。そんなに時間はかけねえからさ。」

「相手してゐる暇がねえつづてんだけー。」

なんとも威勢がいい男らしい女性だが分が悪い。

不良は全員男だ。

実力行使にでもでたら女の腕力じゃかなうわけがないだろう。(一部違うヤツもいるが…それは置いといて)

ここは駅の近くであり人通りが多いはずだが、通る人々は助けようとしない。

いや、実際助けたいが不良が怖くて手が出せない人が多いくてどうか…。

結果なにも出来ず、ハラハラしながら事の成行きを見守っている。ちらほら女性を心配する眼差しが多くいる。

(仕方ねえ…。)

上条当麻は見守る方ではない。ましてやマジヒストでもない。ただ目の前で困ってる人がいるから放つておけない性質なのである。

「はなせって…！」「おい。」「

助けられるのなら自分が傷つけられることも厭わないのだ。それが上条当麻というものだ。

「そいつが嫌だって言つてるんだろ？離してやれよ。」

「あ…。」

「ああん？なんだよ、てめえは。」

「そんなのどうだつていいだろ。だいだい女一人相手に男がぞろぞろと囲んで恥ずかしくねえのかよ？」

「あんだと…！」

「ぶつ殺せ！」

「ヤベ！？おい、走れるか！？」

「え！？あ、ああ！」

当麻は女性の手を握り、不良から離して走り去った。

無論追いかけたが、しばらくすると不良たちが追いかけることを諦めたのか単に見失ったのか解らないが後ろを振り向けば追いかけてくる気配はなくなつた。

「ふはー…巻いたか。おい、大丈夫か？」

一緒に逃げていた彼女は下を向き顔は見えなかつたが、荒い呼吸し、なんとか息を整えようとしている。

逃げてたとはいえ、男である当麻の脚力に女性は追いつけなかつたようである。

「だ…大丈夫…げほ…運動は出来る方だが…も…もう少しスピードを落としてほしかつたな…げほ…！」

「あー…悪い…。お詫びにジュースとか買つてくるからセイのベンチで待つてくれないか？」

「ああ。少し休ませてもらう。すまないな。」

「いいつて。じゃ待つてくれ。」

女性の顔を見ることがなく当麻は自動販売機の方に走つて行つた。

「相変わらず走るのが早いな…げほ…！」

この声を彼は聞くことはなかつた。

+++
+++
+++

「ほい、買つてきたぞ。」「サンキュー。」

まだ呼吸が荒いがさつきよりは幾分落ち着いてきたようだ。
顔は下を向いたまま手だけ動かしそれを受け取った。

「ふはー。生き返るー。」

「紅茶だけどそれで良かったか?」

「飲み物は好き嫌いないし、なにより助けてもらつた人から貰うモノは無下には出来ないだろう。」

「そりや…まあ…。」

「そうだ、まだお礼を言つてなかつたな。助けてくれてありがとう。」

「

そのとき、ゆつくつとスローモーションのように彼女は当麻の顔を見た。

当麻は初めて…

彼女の顔を見る…

(うわ……ー)

助けた時も、逃げた時も、一度だつて当麻は彼女の顔を見てなかつた。

(こんなに美人だつたのかよ!…)

オルソラのような慎ましさを感じる美人とも、神裂のような強さを感じる美人とも違う。

彼女はピアスしてるだけであんまり飾り気がないのに彫刻のように作られた感じで品が漂うのだ。

顔はもちろん整つており綺麗と感じられる美しさだ。

肌も生まれた赤ん坊のようにキメ細やかで荒れさは微塵も感じられ

ない。

服装は簡素だがそれが一層に彼女という存在を際立てている気がする。

髪は黒くて長く枝毛はないんじやないかと思ひほど艶やかだ。

つた。

それがあとめないとまるで完成された世界最高の彫刻品のようにたった一
今、三の前こ本当に美人はどの一つのものが見せられた氣がある。

て、どうか世界で彼女しかいないんじゃないんだろ？

「？おーい、どうしたー？」

「はっ！？」

上条当麻はオルソラや神裂のような美人さんに接することが多いため意識を取り戻すには時間がかかるなかつた。

普通彼女に初めて会う男性には取り戻すのに5秒はかかるなかつた。

それほど人を魅了する女性ということだ。

「あ…悪い…え…と…どういたしまして!…! / / /

いくら美人さんが多く接触したとしても照れるもんは照れる。
思春期真っ最中の16歳上条当麻だ。

「そんなにかしいまなくていいんだじゃないか？俺とお前の仲なん
だし。」

え
？

今、何といつた？

彼女は近づいて当麻の耳元に声をかける。
それも当麻しか聞こえない小さな小さな声で…。

「まあ、忘れられても仕方ないよな…。だつて君は…」

徐々に少し寂しさを帯びた声に変わる。
当麻は嫌な予感がした。

まるで秘密が明るみに出てしまった気がした。

「記憶を失っているんだから。」

ぱつーーー！

瞬間当麻は彼女から距離を取るように腕をふるつた。
幸い彼女には当たらなかつたが、当麻はそれを気にしている暇がな
かつた。

当麻のとつては記憶喪失のことを絶対に明かしてはならない事柄だ
からだ。

インテックスが泣くかもしれない。

そんな想いを抱きながら…。

「なんで…ーーーしーーーんあ?/?」

面を食らつた。

彼女は人差し指で口を当てていた。

『静かにしろ』の命令図だつた。

また当麻しか聞こえない小さな声で

「君にとつて記憶喪失のことは誰にも明かしたくないんだろーーー?場

所を考えて！！」

そうだった。

ここは中央公園。しかもかなり広い公園だ。

当然、昼なので人はたくさんいるし、俺たちの近くに通ったカップルらしき人が疑問の眼差しで向けられている。

大方、俺が先ほど叫んだことを気にしてしまったんだろう。カップルは何事もないようだと思ったのか俺たちから離れて行つた。

「…そんなに警戒しないでよ。傷ついたじゃないか。」

「…悪い。でもどうして…。」

どうして知つている。

記憶失う前の俺と知り合いなのは解る。

だが、記憶を失っていることは俺とあの医者しか知らないはずだ。

「んー、ここじゃ人が多いし、まず話せるとこへ案内してくれないか？」

+++++

「君にしちゃめずらしいな」

そこは古ぼけた、でも緑もあって品のあるバンガローのよつなおしゃれな喫茶店だった。

人は少ないが「コーヒーの香りがす」くいい。
低価格でこれを飲めるとは驚きだ。

2階建てなので、店員があまり通らない2階の方の端側に席を取つた。

「昼食べてないから頼んでもいいか?」

「おひ。」は食べ物でもつまいからな。」

店員さんにオーダーし、注文品が来てから話した。その間に世間話をしたが、本題はここからである。

「んじゃあ、聞くぞ。どうして記憶喪失のことを知ってるんだ?」

注文したアイスコーヒーを飲みながら彼は聞く。

「話すと長いけどね。まず俺との関係から話そつか。

彼女はダージリンティーにミルクを入れながら話を始める。サンドヴィッチを食べながら。

「俺の名前は…忘れてるだろ？から紹介するよ。
月神つきかみ
聖ひじりだ。」

ג' טהראן

の君はそう呼んでたんだ。」

卷之二十一

名前で呼んでいい」とからにして彼女とは親しかったんだろう。多

ほんとに話してるんじゃない!」

「あ、悪い！」

「んじゃ、続けるぞ。君と俺は生まれた時から幼馴染の相柄なんだ。

「

沈黙。

しばらくして…。

「お…おさななじみ…？」

いたのか？俺に？

「…なんだ、その疑問に満ちた日は？言ひとくが嘘はいつてないぞ？」

何というか目の前にすんげー美人さんがいるんだぞ？
スーパー・ウルトラ美人さんがこの上条さんと幼馴染？
こんなおいしい話があるわけねえだろ！！！
と言おうとしたが…

「[写真あるけど見るか？」

言ひ前に聖によつて遮られてしまつた。

「ほれ」と手渡してきた写真の中には2人の子供が映つていた。
1人は明らかに上条当麻。そしてもう1人は…

「聖…なのか…？」

思わず疑問形になつたが、確かにもう1人の子供は確かに聖のもの
だつた。

2人で仲良く遊んでいる光景に当麻は暖かく感じられた。
覚えていないはずの記憶なのに…

「聖…」

「ん、なに？」

「悪い。ホントに覚えていないんだ。」

どんなに仲が良かつたのか今の当麻には覚えていない。
聖がどんな人物なのか今の当麻は知らない。

なにか大切なものを失つてしまつた氣がしてなんだか申し訳ない気持ちになつた。

「いや。君が悪いんじゃないんだ。謝る」とじゃない。」

「でも…」

「本当に気にしなくて良いんだ。どうせ君のことだから、記憶を失うような出来事を直面していたのなら…」

聖は断言した。

まるでその場を見ていたかのよつて…。

「何か大切なものをなにがなんでも守り通したかつたんだろう？」

驚いた。

彼女は上条当麻の人間性の全てを知つてゐる…。

「君はそういう奴だ。守れたか？」

優しく微笑みながら彼女は聞いた。

「…ああ。」

彼女のこととは覚えていない。

けど彼女は俺を知つてゐる幼馴染として言葉をかけてくれた。

「あ、そうだ。俺と幼馴染なのは解つたけどさ、ビリから記憶喪失のことを知ったんだ？」

聖の正体は俺の幼馴染だと解つたが、それじゃ記憶喪失を知つたといつ理由にはならない。

「あー。もともとそんな話だつたな。」

「…おい。」

「はは！」「冗談だ。君は俺に対してもう疑いは無くなつたようだし、

続きといきますか」

「…う…」

確かに聖が紹介される前は警戒や疑いを持つていた。

それは当麻が魔術側と接触が多いため油断はならなかつたためである。

正直、聖自身も魔術側かもしれないという疑いが当麻にはあつたのだ。

「…悪い。」

今となつては仮にも幼馴染に対してもう悪いことをしたと思つ。

「君が記憶喪失だということを俺は知つてゐるからな。突然知らないヤツにそんなこと言われたらそりや警戒心も抱く。それを知つててやつたんだから気にするな。」

一呼吸を置いて、

「俺はもともと学園都市の生徒じゃないんだ。今日外国から帰国し

たばかりだ。」「

「…は？」

「外国…？」
幼馴染でしかも親しげに接してくれるから日常的に一緒にいるのだ
と思った。

「外国つて…。じゃあ能力はないのか？」
「ない。」「

キッパリとした答えが返ってきた。

「外の学校に通っているのか？」

「おいおい、この学園都市は配達車諸々、生徒の親や兄弟でもよつ
ぱどでもない限り入れないとこらだろ。」

「しかも申請してバスを貰わない限り無理だ。」と付け加えた。
そのとおりだ。

友達だからって幼馴染だからって一般公開される日でもない限り学
園都市に入れるわけがない。

「ちなみに俺は外の学校すらも通っていない。」「

「へ…？」

今度こそ本当に訳が分からなくなつた。

(聖は俺と同じ年だよな…?)

先ほどの写真を見る限りそう見えた。

子供の身長は著しく成長するため、1年成長したら1年前の子供と

比べるとかなり差がある。

まさか聖は本当に小萌先生のような未知的な存在なのか？

「俺と君は同じ年だよ。この年で20歳過ぎに見えるのはマジ勘弁。」

どうやら表情に出ていたのか聖は当麻がなにを考えていたのかを見抜いて言葉をかけてきた。

「正しくは通つてないんじゃなく、通う必要がないから。」

「俺、すでに大学卒業してんの。」

「はあ！？」「

「10歳のときに大学卒業してしばらく研修生として学園都市でかい大学病院で勉強してたんだ。」

聖の説明からすると「アーヴィング」と「アーヴィー」。

彼女はもともと医学に対して天才的であったため10歳で外の大学で大学卒業単位を取得し、さらに勉学をするため学園都市にある病院に来た。

三麻は小学生から学園都市にした。『あたり一慶』に三麻と別れていたといつ。

学園都市に来てから当麻と再会しよく一緒に遊んでいたのこと。
そして14歳の春、学園都市での勉学を終えたとき、正式に医師免
許を取り、医者になることができた。

でも、まだ若すぎるため当分はある医師の下で助手として働いていた。

16歳の春の終わりにある医師が

「『国境のない医師団』に欠員が出たんだ。3か月しか参加できないがどうだ、君、やつてみないかね？」
と言われて聖は驚いた。

『国境のない医師団』とは文字通りで医療が万全ではない貧しい国を巡つて無償で診療を行う世界最高峰の医師の集まりのことだ。あまり大人数では移動できないためメンバーは20人弱ぐらいであり、希望すれば参加できるそんな簡単なものではない。技量の他に体力、国によつて異なる伝統、文化、歴史、言語までも知識に入れておかなければ通れない狭き門なのだ。

そんなグループに自分は参加させてくれるというのだ。団員と比べて腕も経験も浅はかのは明白であり、迷惑かけるかもしれないと思つて悩んだが、良い経験になるかもしれないと思つて聖は承諾したのだ。

出発したのは7月の半ばだった。
ちょうど夏休みの前だった。

「日本の時刻で言つと7月31日の夜に先生から電話があつたんだ。俺と君の仲をよく知つてたからね。」「誰なんだ？ その先生って…。」「君も知つてるはずだ。なにしろ何度も世話になつてゐるらしいし。」

「…まさか…。」

1人しか思い浮かばなかつた。いや實際には1人しかいない。

「あのカエル医者か？」
「カエルつて…失礼な言い方だな。カエル…見えなくもないけど…
そうだよ。」「…誰にも言つなつて言つたのに…」

心底恨みたくなった。

誰も言わないつて約束したのに……！

「おーおー先生は悪くねえよ。俺にそれを伝えたのは君が目覚める前だ。」

「え……？」

「あのとき君が重傷を負つて脳の一部を破壊されていくところの事態を俺に伝えてくれたんだ。多分一番仲が良かつた自分に伝えるべきだと判断した後すぐに電話をしてくれたんだろう。君が先生と約束する前に俺は知っていたんだ。」

「……知つてどうして俺に会つたんだ？」

「ん？」

「普通、会わねえだろ……？ 聖の「」とも昔のことなにもかも覚えていない、記憶喪失のこと知られたくない俺に会わないだろ！？」

知つてゐるはずだ。俺がこのことを誰にも知られたくないことを解つてゐるはずだ。昔の俺はもういないことを。

なのに、なんで……？

「最初は泣いたよ。」

「ぱつりとさう呟いた。

「ずっと一緒にいた君がもうビートルにもいないと解つて、任務中だつたのにも関わらず泣いたよ。一日中泣いてた時もあった。団員の皆さんもすぐ心配かけたな。」

「…………。」

「けどね、本当にずっと一緒にいたから、君から離れたくなかったから、この絆を失いたくなかったからたとえつらへても君の下に来ただんだ。ねえ、わかる？」

「…俺は…。」

「昔の君が好きだった。今の君も好きになりたい。だって君は君だから…」そ一緒にいてふざけあって、笑いたいんだ。」

「…。」

認めてくれた気がした。

インテックスが俺の病室で過去のこと何もかも失くした俺の姿を見て泣きそうになり、崩れそうになっていた。

彼女のためにとつとの嘘について、昔の俺を気にして演じながらここまできた。

だけど聖は今の俺すらも見てくれていた。

「…ありがとう、聖。」

「ああ。」

当麻は聖の手を握り素直に感謝の言葉を述べた。

実際ああこう言葉には慣れていない上条当麻は照れ隠しに、

「…けどな、やつらのは愛の告白っぽいぞ。」

そう茶化して普段なら、殴られるところだが聖はしなかつた。

「ははーかもなー！」

軽やかに笑っていた。

俺はその反応に驚いたが、昔の当麻もそんな感じだったと言つてくれた。

昔の俺と今の俺とあんまり変わつてない気がして少し救われた気がした。

「もしさ、君が昔の君を知りたかったら話すよ。気になるだろ？」
「気になるつていえばなるけど…その前になんで俺の名前を呼ばないんだ？」

「あー…、いきなり君にとつて初対面の相手に名前で呼ぶなんて馴れ馴れしいと思つたから…。もつといいのか？」

「なるほどな？。悪かった。どうも…。じゃんじゃんと上條さんの名前を呼んでくださいまし。」

「んじゃ、当麻！」

彼女は嬉しそうに呼んで笑つた。

本当はずつと呼びたかったんだろうと思つて申し訳なく思つた。

彼女は1から今の俺との関係を新たに築こうとして、今の俺を知ろうとしてくれてる。

本当に嬉しかつた。純粹に。

「どうする？強制はしないけど。」

「んー知りたいな。昔の俺はどんな感じだったか気になるし。」

「16年分だからなー。何から話せばいいんだろ？」

「じゃあさ、小さい頃から。どんな遊びしたか覚えてるか？」

「確かあの頃は…」

聖は小さい頃の俺の色なことを話してくれた。

とはいっても小さい頃の遊びや俺の両親と聖の両親は親友らしく交流も多かつたらしく。

家がお隣同士になるほど仲が良かつたようだ。

まるで他人事のように感じてしまつて虚しかつたけど…

聖はこれから築いていけば良いさと笑つて応えた。

そつやつて昔のことを話しながら少しずつ時間が過ぎて行つた…。

「うわー？もうこんな時間ー？」

時計を見ると5時半過ぎだ。一矢りなんでも話過ぎだらうと2人とも反省していた。

「う～…話しつりなにナビリリナシじよ。付き合わせて悪かつたな。」

「いや、会えて良かつたよ。退屈しなくて済んだし楽しかったからな。」

「やうこつヒシマツシヒヤウんないんだな。無自覚さんよ。」

「？」

「いや、俺も会えて嬉しかったよ。今日君に会つて本当に良かつた。」

なぜだか解らないが当麻は顔を赤くなるのを感じた。

「当麻。」

「えー？ な、何で？ やりつますかー？ ？」

日本語がおかしくなってしまったが聖は気にせず彼に近づいて…
そして手を繋ぎ、聖と当麻の額を合わせた。

当麻は驚いて

「ひじ… ー？」

名前を呼ばうとして止めた。

なぜなら彼女は何かを話し始めたからだ。

「記憶を失つていろいろ苦労するかもしねえが…頑張つてくれ。君の周りにそのことを知られたくないのなら尙更だ。過去のことでも苦悩するのなら俺の下にこい。言葉をかけて安心させてやる。過去

のことでどうしようもないことにぶつかつたら俺を呼んでくれ。昔の当麻を覚えている俺がなんとかする。俺は当麻を失いたくない。俺にとつて君は大切な人なんだ。」

恥ずかしい告白まがいなセリフだが聖は真剣だつた。
どれほど彼女が当麻のことを想つてゐるか直に伝わつてきた。
ならばそれの相応の言葉を彼女に伝えるべきだらう。
16年も一緒に生きてきた大切な幼馴染へ？？。
繋いでる手を少しだけ力を込めて彼は言つた。

「俺は確かに過去の記憶はない。けれど聖がこうして目の前に来てくれるたんだ。いつも不幸だと言つてゐるけど、今は幸福だと感じられる。これほどお前が俺を想つてくれたんだ。今の俺はこんなだけど、これからも一緒にいてくれるか？聖のこと知りたいんだ。俺も聖を大切な人として見ていてほしい。」

恥ずかしかつたが、当麻は精一杯応えた。
本心からの言葉だつた。

彼らの間に偽りなどなかつた。

彼らには他の人では絶対に結べない信頼や誰よりも替え難い絆で結ばれています？？。

「？ありがとう、当麻。」

ほとんど泣きそうな声で彼女は言つた。

それが合図となりどちらからでもなく抱きしめ合つた。

まるで自分の半身が再会したかのように一…。

+++++

午後6時15分頃上条当麻は帰宅した。

1人の少女・インテックスが駆け寄ってきた。

「お帰り? 当麻。遅かつたんだよ。」

「ん? ああ、ちょっといろいろあつたからな。」

「…? どうしたの? なんかいつもより顔が晴れやかなんだけど?」

「久しぶりに良いことがあつたからな。」

「? ? ?」

当麻は落つこちても、落雷にあっても壊れない頑丈な携帯電話を取り出し、ある人物の名を見ていた。

帰る前に聖とメアド交換をしていたのだ。

『月神 聖』

本当に衝撃な1日だつたが、彼女と会えたことが何よりも幸福だつた。

自分を大切だと言葉で伝えてくれたことが嬉しかつた。自分の過去のことを知つている彼女に会えて嬉しかつた。いろんな嬉しさが混じり合つてその感情を糧にさらに前を向いて歩ける気がする。

不思議なことに歩く力は非常に軽やかだつた。

インテックスは上条当麻の顔を凝視していた。
顔は非常に穏やかで優しそうで、何か大切なものを見てゐるよつな?
そんな表情だつた。

(なにを…だれを…見て…るの?…?)

ギュッと胸をつかんだ。

なんだか…とても誰かに当麻を取られた気がした?。

当麻「そういうやなんで俺のケータイに聖のアドレスがなかつたんだ
る?」

聖 ああ。それか。（笑）

「…」
「…」

聖不二が心にないが、林、「（嫌な予感がする）。）あ、ああ。」

聖・そらが むかし昔あると 〔ソノ〕は 働か 国境のない 国能國 の一員として 学園都市から 旅立ちました。見送りに 来た少年は 1人で寂しく 家に 帰りました。その時の 時刻が 昼頃だつたため、お腹を空かした 少年は 家に 帰る前に 昼食を とりました。食べ 終わつた 少年は お手洗いに行きたくなり、そこで 用を 足しました。ところがー…。

聖「ケータイがポケットから落ち、トイレの底に沈んで流れてしまつたのです」

聖「…とまあ、おかげであつちにいても連絡がとれなかつたけどな。

当麻「……なぜあなたはそんなことを知ってるんせう……？（泣）」
聖「君が俺の先生に言って俺に伝えさせたんだよ。』ケータイがト

当麻「……（泣）」

俺の幼馴染はすごいヤツ

「インデックス、起きろ！ 朝飯だぞ！！！」

しし力派 起きなさい

第2章 俺の幼馴染はすごいヤツ

A
M
7
:
4
5

「つたぐ、いつまでも起きないから朝飯冷めちまつたじやねーか…。

テレビをつけて、朝のニュースを見ながら朝食をとり始めた。

アーティストによる「アーティストがアーティスト」

100

「そんなこと言つたつて仕方ないんだよ！お布団が気持ち良すぎて出られなくなつてたかも！」

「氣持たぬいのは解るが、布団のせいにすんなふとんの」

「？当麻？？」

何故か固まってしまった当麻に不審に思いながら彼の名前を呼んだ。揺すつても呼んでも応答がなかつたので、インデックスは彼の視線をたどりながらあるモノを見た。

テレビだった。

テレビに映っているのは1人の女性がインタビューを受けていると
ころだった。

この世のものは思えない美しさで同性ながらもインテックスはし
ばらく見惚れていたが、しばらくしてはつと意識を取り戻した。
普段なら知らない女性に当麻が見惚れている状況は気に食わなくて
怒りで彼の頭にかじりつくところだけど、この女性なら……

（この人なら仕方ないのかも……）

でも、悔しい気持ちがあるのも事実で、半ばヤケになつて残つた朝
食をとり始めた。

そして上条当麻の分も食べてしまい本日の朝食は全てなくなつた。

このときインテックスは知るよしもしない。

テレビに映つっていた美しい女性は上条当麻の幼馴染だということに
――。

+++++
+++
++

PM12:40

「ねえねえ、見た～？」
「見た見た！スッゴイきれいな人だつたよね～！」
「あれで俺らと同一年かあ……。信じられねえな～。」

……朝からずつとこの調子である。

この学校は（……いや、この学園都市全体かもしれない……）朝のテレビに出てていた1人女性のことと話題になつていて。現在昼休みだが、この話題が途切れることはなかつた。

……混ざりにくい……。

なにしろ話題の中心になつてゐる人物は先日に出合つた上条当麻の幼馴染・月神聖だ。

幼馴染に對してどう評価しようと？

上条当麻の心情をお構いなしに青髪ピアスが突進するかのよつてつに走つて來た。

「かみやーん！なあなあ、テレビ見たん！？見たよね！？見たよな！？えつつらい美人さんやつたなー！あんな人がお隣にいてくれたらメツチヤ幸せやと思わへん！？」

「いやいや、普通でしたよ。上条さん的には、つーか朝も言つたよな、それ。

「にゃー。確かに見たときは驚いたぜい！しかも冥土返し（ヘヴンキヤンセラー）がいる病院で勤務してるぜよ。容姿端麗、頭脳明晰、性格は知らんが金錢的に問題なし！女として申し分ないどころがまさに高嶺の花つて感じだにゃー。」

「高嶺の花？アイツが？？

確かに外見は綺麗だが、中身は至つて普通の女子（男勝りな部分もあるけど総合的に見て…）つて感じがするよなー…。

「… ゃん…みやん…」

けど言われてみれば俺つてとんでもない幼馴染を持つてんな。 14 歳で医師になるなんて天才でもない限りできないよなー。

「… あり…せういやなんで医師なんて目指したんだ？

「かみやん…」「ドゴン…」

「ぶほおつつ！？！」

な、何が起こつた!?

一
か
歐
た
よ
な

！ いやいや待て待て待て！！殴る！としないで
かみせん

「啞」

いから戻してもらつただけだぜい?青髪ピアスに感謝するんだにや
ー。ところで、かみやん?」

「ケータイのバイブがさつきから鳴つててうるさいぜい。止めてく

れんかに

ブーブーブー

： 本當だ。

聖のこと考えすぎて気がつかなかつたのか。

「わ、わっ…！今、出るからって…ほまつー？」

着信 月神 聖

今、話題の中心になつていた彼女からだつた。

「す…すんません！上条さん突然の頭痛で保健室に行つて参ります

……で、一して行くとすんな。青髪、し、し、し！」

「ちょ…待ちなさい、上条当麻！もうすぐ5限目が始まるわよ！」

あからさまな嘘をついてるのがバレバレだがそれどころではない。急に様子が変わった当麻におかしく思いながら興味本位でついて行こうとした青髪ピアスに牽制し、吹寄の声に気づかなかつたフリをして保健室ではなく今の時間帯なら誰もいない屋上へと向かつた。上条当麻の突然の行動にクラスメート全員はポカーンとしている。

「…上条君、どうしたんだろ?」

「…知らないわ。どうせ上条のことだから下らないことなんでしょう。」

姫神は様子が変わった上条に対し心配はしていたが、吹寄はいつのことだと簡単に処理していた。話題の中心になっていた人物から突然電話がかかってきた上条当麻の心情も知らずに…。

+++++
++

ピッ

『おっ。あまりにも遅いから切ろうと思つたところなんだ。……?』

『…なんでそんなに息が切れてんの?』

「や、なんで、も、ね、え…」

たつた今教室で聖のことを話していたのだ。

彼女は今、芸能人のような存在だ。だから教室で電話した場合、クラスマート（主に青髪ピアス）になんて言われるか解つたもんじやない。

「…ふー、ところで何かあつたのか?電話してくるなんて珍しいな。」

「

今までメールしかやり取りしてなかつたのだ。

内容はたいてい『おいしい喫茶店を見つけた』とか『今日もビリビリに追いかけられた』とかそんなたわいない話をするだけだが、上条当麻はこの時間がすごく楽しいのだ。

好きなものや嫌いなもの、意外と仕事に対しては真剣なところ、1つ1つ知る度に聖のことが解るようになつてきて嬉しく思つていて、聖も今の上条当麻を知ろうとしてくれている。

それもどれだけ嬉しくて泣きそうになつたのかを聖は知らないだろう。

今の上条当麻にとって聖とのやり取りは記憶を失う前の自分を気にせず、ありのままの自分をさらけ出せる貴重な時間なのだ。ただそれはメール上でのやり取りであり、お互い電話をしたことがない。

それは授業・勤務時間中に電話をかけたら相手の迷惑になるだらうとお互いに考慮したためである。

『ちょっとなー…。当麻に時間があつたら手伝つて欲しいなーと思つて…。』

何とも歯切れが悪い。

「…仕事のこじだつたら手伝えねえぞ?上条さんは普通の学生さんですよ? できませんつて。」

『違う違う。それは俺がやるべき仕事だから自分でやる。当麻にやつて欲しい』とは仕事じゃなくて、片付け。』

「…?」

『…俺セー、外国から帰国したばかりじゃん? 当然、学園都市に帰つたばかりじゃん?』

「そうだな。』

「

『どうやらあっちに行っている間にマンションの改築工事やつたらしくて…。ありがたいことに先生が俺の荷物全部預かってくれてて、処分されずに済んだけど…。おかげで帰国してもしばらく病院で仮住まいしてた。』

「…初耳だぞ、それ。」

『あー、今言つた。それにもつと前に言つたら当麻なら「俺の部屋に来ればいいじゃねえか。」とか平氣で言い出しかねないし。』
『…。』

確かに言つうである。

今はインデックスと同居しているため、それはないと思つが…聖のために何かしだらう。

『んで、5日前に改築工事が終わつたから、預かつてもらつた荷物を全部戻すことになつたんだよ。私物の片付けはなんとか終えたんだけどな…。仕事に関する書類やファイルがまだ段ボールの中なんだよ…。』

「ほう。」

『…なんとか自分で片付けよつとはしたんだけじや…。来週は学会があるから論文もまとめなきゃいけないし、資料を見ようとしても段ボールの中でどこにあるのか解らないし、見つかんないし、この後探す時間が…とてもじゃないがあまり確保できないんだ…。』

『てことは…学会まであまり時間がないから資料を探すついでに整理して欲しいつてことか?』

『…なるな。』

なんだか疲れてるのか声に霸気がない。

「解つた。ついでだからなんか飯でも作つてやるよ。」

『おー…。つて、はあ！？』

「どうせ、飯作らないでカロリーメイトとか済ましてんだろう？それじゃ身体に悪いからなんか作るつて言つてんの。」

『…なんで解るかなー？当麻は…』

当たつてたらしい。

聖は仕事に真面目な分、食事とか疎かにしてそうだと思つたが…やつぱりか。

『…解つた、お言葉に甘えるよ。時間が空いたらなんか奢るし…ありがとうな。』

『いえいえ。どーいたしまして。…つーか仕事し過ぎなんじゃねえの？今朝もそうだし…。』

『今朝？』

『テレビ、出てただう？』

『あー…、『国境のない医師団』で歴代最年少団員だつたから…その経験を語つただけだ。この手のマスコミは扱いのけると後が恐いからな。』

本当は出たくなかつたんだけどな、と聖が苦笑しながら言つ。

『俺の態度が悪いと俺の先生のイメージも悪くなるんだ。先生のイメージが悪くなると今度は病院全体のイメージが悪くなるようなもんだよ。強調しすぎかもしけないが、あるんだよ。世の中にはな。しまいには患者が1人も来なくなるかもしれない。』

『げ…。』

絶句した。

実際はそんなことはないかもしえないが想像してみると恐ろしい。

『医者が医療ミスをした。そのことが問題になつて記者会見を開いてカメラの前に謝った。果たしてこれで病院のイメージが悪くならないか?違つだろ? ただ医療ミスをしただけでイメージが大幅に下回る。謝つたところでどうにもならない。これは変えられない事実だろ。それと同じだ。』

「……。」

『イメージつてのは結構大事なんだ。俺のせいで潰れたなんてシャレにならんし……。それに患者さんに申し訳ないだろ。』

『……訂正。やっぱ聖はすごいヤツだ。』

『はあ?』

普通の女子と何も変わりもないと思つていたが違つた。

聖は病院や患者のためにちゃんと考えて行動して、回つてくる仕事を人に頼らず自分でやつていて。正直すごいと思つた。

「なあ、聖。仕事とかイメージとか頑張るのもいいんだけどさ、たまに息抜きしないとお前が潰れちゃうだろ。俺がいるんだ。俺にできることならやってやりたいし甘えてもいいんだぜ?」

すごいけど俺たちより2歩3歩以上社会に出ているせいが、かなりムチャしているのが解る。少なくとも当麻はそれを解つていた。

『……それなら問題ないさ。』

「え?」

『今さつき甘えたばかりだ。書類を整理するついでに飯も作つてくれるんだろう?……それに俺には仕事仲間もいるが、正直甘えるとか助けを求めるとか……そういった行動は今のところ君にしかできない。』

「……そつか。』

ストレートすぎる言葉に正直照れて顔が熱いが、それ以上に心が暖かくなるのを感じた。

嬉しかつた

「じゃ、じゃあ4時ぐらいに行くわ。また後でな。」

『おー。んじや俺ん家は…後でGARUの使用コードをメールで送る
よ。そつちの方が解りやすいだろ。あ、あと通林。』

「どうした？」

『そつちの授業は大丈夫なのか？この時間だと5限目すでに始まつてんじゃないのか？』

↑
⋮
?

思わず携帯電話の時計を見る

5限目開始してから15分経過。

ぶ
ち
ツ

電話が切れた音である。

おそらく今頃は全力疾走で教室に向かっているだろう。

「あー…なんか悪いことしたかな?」

聖は自分の研究室でパソコンに向かいながら例の論文の続きを 작성し始めた。

しばらくして何かを思い出したかのように携帯電話を取り出し、あ
る人物に電話をかけた。

『……どうした?』

男性の声である。まるで聖がかけて来るのを解っていたかのようない返事だった。

「ああ……、当麻が前の当麻と全然変わらなくてな……。嬉しいんだよ、当麻が当麻のままで。」

『……そりか。』

「君はいつになつたら当麻に会つ氣なんだ?」のままだと……。『……。』

「……君の氣持ちはよく解つてゐる……。なにしれ?……」

「……君は当麻の……。」

聖は電話の彼に向かつて悲しみや優しさを交えた複雑そつな声で言葉を放つた。

その言葉は彼女以外誰もいない部屋に響いて溶けていく……。

とある2人の夜のメールやり取り

当麻「うー… 今日もビリビリに追いかけられた…。いつたい何なんですか上条さん何かしましたか？頼むからもう追いかけないで…。」
聖「それ、俺に言つてもねえー…。んで？そのビリビリってのは何だ？まさか『ダーリングだつちや』ってやつか？それはいけない。君の妄想としてはかなり痛すぎるぞ。」

「当麻一人の苦悩を妄想で片付けようとすんな！！あと時代が古すぎ
！！はあ～…ビリビリつてのは常磐台の御坂美琴つてヤツだよ。
なんだか知らねえが会う度に勝負を持ちかけて追いかけられてんだ
よ…。」

聖一へえ。面白い人だなって……御坂美琴……？ちょ……待って！？なんで御坂美琴と……？え……お、落ち着け……！名前が同じだけで赤の他人かもしれない……！」

当麻「しかも人に向けて超電磁砲を平気で放すし、何度死にそうになつたことか…。」

聖「君のせいだよ！－！」

必然的な出会い？

「御坂さん、白井さん、こっちですよ～！」

「そんなに大きな声で呼ばなくていいんですよ～ちゃんと聞こえますから、初春。」

「はあ～初春つてば、単純だな。」

「そこが初春さんの良いところじゃない、佐天さん。あ、こニードしょ？ 最近新しくできた喫茶店つて。」

第7学区にある黑白赤しか彩られていない斬新な喫茶店だが、大人っぽくて雰囲気もよく、コーヒーの香りもしつこくなく、デザートも美味しいということで評判を呼んでいる。4人の少女は…というより頭になぜか生花がたくさん飾つているヘンテコな少女・初春に呼ばれて来ただけだが、他の3人もそれなりに楽しみにしているようだ。

喫茶店に入ると、そんなに広い訳ではないがほぼ満席状態だ。

「うわあ～お客さんがいっぱいですね～！」

「ホントだ…。女人だけじゃなく男の人も結構いる…。割合半々…ぐらいだよね？」

「そうですわね。この喫茶店のデザインが女性向けではなく中性的で現代アートのような感じですから殿方も入りやすいんでしょう。ねえ、お姉様。……お姉様？」

お姉様と呼ばれている少女・御坂美琴は先ほどの3人の話など耳に入つていなかつた。

店内の入つてから見えてしまつた黒くてシンシン頭の男が店の端にいる。

男と向かい合つている人…後ろに向いてるから顔は見えないけど髪

が長いから多分女性だと思われる人と楽しくお茶をしていました。…といつより御坂にはそう見えていた。

「…アイツはいつたにここで何をしているのよ。…………」

第3章 必然的な出会い？

上条当麻と向かい合っている女性の正体は彼の幼馴染である月神聖だつた。

彼女は今…笑っていたが猛烈に怒っていた…。

「ああ…。説明してもらおうか、上条当麻くん？」

「…………えーと…これは…」

聖の手の下には上条当麻の診療簿があった。

これは聖の恩師であるカエル顔の医者から渡されたものだ。

先生曰く

『月神君は誰よりも上条君の傍にいるからね。君はまだ若いから患者さんを受け持つことはできないけど彼ならやつてもいい。その方ができることが多いからね。』

何のことだと思ったが当麻の診療簿を見たとき驚愕した。

なつつんじやこりや……………と叫びたくなつたが、驚きすぎて発声すらも叶わなかつた。熱傷、切創、骨折、全身打撲、一部の内臓の圧迫などなど…。しかもどれも怪我の度合いが半端ない。この中で1番驚いたのは右腕の切断だ。

なぜ切断されていたのか解らないがよく生きてくれたなと思つほどだ。

いや、先生が治療しなければどこが後遺症や障害が起きてもおかし

くない。

ありがとう先生…。

しかし、当麻はよく喧嘩をする方だが、これは喧嘩で負うような怪我じゃない。

まるで戦争の中心に赴いた者が負う怪我だった。

聖はかつて貧しい国を巡つて無償で診療を行つ『国境のない医師団』の一員だった。

貧しい国を巡るのだから当然、紛争や地雷などに遭いやすかつた。そこで負傷した何十人も治療してきたから、怪我の程度で争いの度合いが判別できる。

そういうえばこの前もそうだった。

この学園都市で展開されていた無数の翼のよつた物体が消えた後、当麻はびしょ濡れの恰好で怪我の治療のために私の下へ訪ねて来た。あの日もそうだった。いつだつたか当麻はなぜか小麦粉まみれで家に訪ねてきた。もう夜も遅かつたので泊まさせてくれと疲れたように弱々しく言われたのを覚えている。制服の下に隠れていた打撲の数々は喧嘩で負う怪我ではなかつた。

数日前は第22学区第7階層にある救急救命病院から緊急連絡を受け、1人の少年が重体のため至急こちらに来て手を貸して欲しいと言われた。先生は病院から離れることができないため、かわりに俺が赴いたのだが1人の少年が当麻だったことはすごく驚いた。

当麻はこの短い期間でいくつもの事件に巻き込まれてゐる。そして巻き込まれてゐる原因はやはり…

「…言いたくなきや言わなくていい。君に怒つてゐんじやないんだ。怪我したら俺たち医者が治せば良い。そのために俺たちがいるんだから。ただ…」

「…聖?」

「…俺が悔しいんだ。当麻がどんな目にあつても力になれないのが

悔しい。だから君の診療簿を見たとき自分に怒ったんだ。『どうしてこのとき当麻の傍にいてやれなかつた』ってな。』

聖の端整な顔立ちが苦渋に歪む。昔から当麻の『』になると冷静ではないられない。それは自分でも自覚している。それほど当麻は大切な人なんだ。

むにひ

……？

当麻の指が聖の頬を思いつきり左右に引っ張つていた。

「『』や、『』や『』ね……。」

「『』や『』や考えずきなんだよ、お前は。」

ぱつと当麻は手を離した。

聖は自分の頬をさすつた。

当然だが、痛かった……。

「確かに短い間でこんなに怪我してくる俺が悪いヤジを。でも、俺はピンピンしてるし、ちゃんと聖の前にいる。過去のこととでじつにならないことを『』ぢや『』ぢや考えんな。過去より今だら。それに力になつてないなんてことはねーぞ?俺はいつもお前に甘えてるばかりだ。どんな怪我してもなんも言わなかつたり、『』ひして隣にいてくれるじやねえか。」

「それは俺がしたい」と。それに当麻に甘えられるのは悪くない。

聖はふつと穏やかに笑つた。

「それでいいんだよ。」

と当麻は言つて穏やかに笑う。

「聖が俺にしたいことは俺が望んでることだからな。」と、ちらりとすこいこと言つたが気に留めなかつた。それは聖も同じだからだ。当麻が聖にしたいことは聖が望んでいることなのだ。

「はー…なんかどうでも良くなつてきた。なーんか俺大人げなかつたな。悪い、君に当たるのは筋違いだつてのは解つてたんだが…。」

「いーや。聖もそういうとこあんだけなーと上条さんは安心しましたよ。」

「えつ。なにそれ。」

「だつて、大人っぽいじやん。働いてんじやん。ホントに同じ年かと思うぐらいだぜ? ちなみに俺この喫茶、初めてなんだけど何がおすすめなんだ?」

「精神的には君らと同じだ。仕事になると子どもではいられないだけなんだよ。この喫茶はカプチーノが一番うまい。」

2人は笑いあいながら、いつもの通りの口常的な会話に戻つていた。

カタンシ

「そつか。じゃ、それにするか。すみませーん。オーダーお願ひします。」

「デザートは良いのか?」

「あつ、忘れてた! どれがうまいんだ?」

「一番人気なのはスフレだ。ふわふわでとろけるような味わいで美味しい。」

バチンツ

「お待たせしました。ご注文をどうぞ。」

「あ、すみません。デザートセットでカプチーノとスフレのブルーベリーをお願いします。」

「こつちはカプチーノとスフレのハチミツを。」

ちなみにスフレのブルーベリーを注文したのは当麻、ハチミツを注文したのは聖である。

バチンバチンッ

「ご注文承りました。少々お待ちください。」と言つて、優しい笑顔の女性店員は向こうへ行つた。…行つた後、隣のテーブルに座っている4人の少女が見えてしまつた…。4人のうちの1人はなぜか放電して、ものすごい形相でこつちに睨んでいた。見覚えがあるが氣のせいだ、うん、氣のせい。

「まあ、周りは大人だからそういう気持ちも解らなくは「あ・ん・た・はどうしてそうやつていつもスルーするのよつ…！」

バリバリバリッ！

「あわわ…！御坂さん、こんなところで電気を放さないで下さい！」

「お姉様、こんなところで能力をお使いになるつもりですか？」

「くつ…！」

先ほどまでの効果音は御坂たちによつて発した音である。

（カタンッ＝4人が客席に座つた音 バチンッ・バチンバチンッ・バリバリバリッ＝御坂美琴が発した放電の音）

店の中では人が多いため御坂の能力を今ここで使うのは得策じゃない。おかげで当麻は命拾いしたが…。

「どうやら様?」

聖がそう言って、4人の少女は聖の方を見る。そして固まった。

「…どうしたんだ? 彼女たちは当麻の知り合いか?」

「あー…ツインテールと短髪の方は知ってるけど、他の2人は初めて会うな。」

…ちらりと御坂たちの方を見た。

彼女たちが固まってしまうのも無理もない。聖はかつての『国境のない医師団』の一員であり、幼い頃から医学界の天才と謳われている。加えて一度のテレビの出演で聖の美しい容姿に誰もが見惚れ聞いたことだろう。それで雑誌、新聞などありとあらゆるところに聖のことを無断掲載されていた。記者の行き過ぎた勝手な行動のせいで仕事が差し支えるため本人から怒りの言葉で牽制した後、目立つ行動はしなくなり、今はやっと落ち着いたところだった。總じて聖は今、有名人であり、学園都市で彼女を知らない者はいない。

「お待たせしました。カプチーノとスフレのブルーベリーとハチミツをお持ちしました。」

先ほどの店員さんが注文したものを持ってきた。
それが4人の意識を取り戻すキッカケとなつた。

「んじゃ、当麻、温かいうちに食べよつぜ。ホントにすんげーうまいから。」

「あ、あのー。」

食べ始めた当麻と聖に御坂は声をかけてきた。なんで「コイツがこの人と一緒にいるのか訳が解らない」という疑問に満ちた表情だった。

「あ、あなた、月神聖さんですよね？なんで「コイツと一緒にいるんですか？」

「…聖とこちやワリーのかよ…。」

「俺は当麻の友人だよ。友人同士が喫茶店にいてもおかしくはないと思うんだが。ときにく？」

「は、はい。」

御坂はどきどきして、ちょっと顔が熱い。

彼女が滅多に見られない美女だからなのか、それとも当麻と一緒にいた女性だからなのか解らないが緊張していた。

「御坂つてことはあの超電磁砲の御坂美琴か？いつも当麻を追い回している女の子だろ？」

「あ、はい。…つてアンタそんなこと言つてんの！…？」

「ホントのことだろ！…つて電気ブッ放すな！お密さんに迷惑だろ！が！」

「へー、本当だつたんだ。お会い出来て光榮だ。知つているかもしねないが俺は月神聖だ。そちらの3人も良かつたら紹介してくれないか？」

聖はふんわりと笑つたら、4人の少女の顔が赤くなつた。
…どうして女人に照れなくてはいけないのだろうか。

「えー…『ほんつ。私は白井黒子と申します。お姉様と同じ常盤台中学校に所属しております。風紀委員も勤めております。』
「わ、私は柵川中学1年の初春飾利です！し、し、し、白井さんと同じ

く風紀委員をやっています！！」

「初春、緊張しすぎ！あたしは初春の同級生の佐天涼子です。あ、でも風紀委員はやってません！」

「御坂さんに白井さん、初春さん、佐天さんだな。ちなみに今日はどうしたのか？」

「あ、今日はここのお店がすごくおいしそうで評判で、ぜひ一度食べてみたいと思って皆で来たんです！」

「そつか。なら急いで方が良い。今日は日曜つてこともあってテザート…とくにスフレが売り切れるのが早いんだ。」

「そうなんですか！？わわつ早く決めないと…！」

4人は慌ててメニューの方を見た。

「…柵川に常盤台ねえ…。」

「?なんか言つたか？」

カプチーノを美味しそうに飲んでいた当麻に尋ねられて、聖は笑顔で

「いーや、なんもねえよ。」

（…そろそろアイツらが転入してくる頃だよな…。）

笑顔の影で聖はそんなことを思つていた。

必然的な出会い？（後書き）

とある天才の幼馴染の仕事

聖「もおー！キツい！…」

当麻「仕事か？患者1人も受け持つていなければずだろ？」

聖「君以外はな。」

当麻「なのになんでこんな仕事があるんだ？」

聖「医師ってのはな患者を受け持つて治療すりや い い つて話じや な
いの。治療・手術に必要なコスト、必要があればコスト削減、治療・
手術に使う薬品とか機器も全部そろえなきや い け ない。他にも色々
あるけど…。しかもそれらをデータ化にしなきや い け ないからパソ
コンも使う。大雑把に言うと俺は情報処理の役割？みたいなものか
な。あとは患者の精神負担を減らすためにも対話、お遊戯会なども
あるし…。必要な時はカウンセラーを勤めることがある。」

当麻「…大変なんじやね？」

聖「大変なんだよ。」

当麻「…（汗）」

聖「まあ、患者が元気で笑顔になつてくれればそれでいい。さらに
終わりが良ければ全て良し！ そう考えられるのも当麻がいてくれる
おかげなんだよな。」

当麻「へ？」

聖「独り言だよ。」

必然的な出会い？（前書き）

学業のため更新が遅くなります。
ご迷惑おかけしますが、何卒ご理解ください。

必然的な出会い？

AM 8:10

柵川中学校校門前

「柵川中つてここ?」

「そうみたいだな。 とこつか早く行こうぜ。 時間が差し迫つてんだ。」

「お前、職員室の場所解んの?」

「…解らねえ。」

同時刻

常盤台中学校校門前

「…なーんであたしだけがここなんだ…。」

第4章 必然的な出会い？

PM 3:18

とあるファミレスにて

「「転入生?」」

御坂と白井はそろつて声を出した。

ここはとあるファミレスでいつものように4人で集まっている。

4人は注文した飲み物を飲みながら、今日柵川中学に来た転入生のこと話をしていた。

「そ、うなんです。男の子2人なんですけど…。」

「ずーん…として初春の周りの空気が重い。
…なにかあったのだろうか?」

「…どうかしたんですの?初春。」

「あー。初春の気持ち解るわ。あの2人、ピアスしてるんだ。その1人が同じクラスになつてね。うちの校則はアクセサリー着用する基本禁止だし、初春は風紀委員として注意したんだよ。それが…」

（回想開始）

『あ、あの初春節利といいます。少しお話ししても良いですか?』

『初春さん?別に良いけど…。あーそうそう朝も自己紹介したけど、俺は香椎 皐月。よつしくー!そつちから名乗つてんのにこつちは名乗らないって訳にはいかんでしょーよー!』

今日、私たちのクラスに転入してきた香椎という男の子は目立つ姿をしている。160cmもあり、見た目は普通の体型だけど、服の上からでも解るほど鍛えられた身体をしていて体格がいい。…いやなくて!…どこ見てるんですか、私!…ごほん、仕切り直して…恰好は普通の制服を着ている。髪は何故か茶髪でも金髪でもなく黒みの緑髪だった。カラコンでもしてるのか、瞳は珍しいエメラルドグリーンで男の子なのにはごく綺麗だと思った。赤やオレンジ色のガラス玉（?）の飾りが付いたリング状のシルバーピアスを両耳につけている。顔立ちは…かつこいいけど…いやいやそうじゃなくて!…とにかくピアスはダメです!…どんなにかつこ良くても田立つても、ここは風紀委員として注意すべきです!』

『あの…失礼ですが私は風紀委員です。…この校則は基本アクセサ

リー着用禁止です。なので、そのピアスを外して頂けませんか。』

大勢のクラスメートに見守られながら、毅然とした態度で初春は香椎に言う。

そして香坂の答えは…。

『ヤダ。』

『…へ?』

『ヤダって言つたの。あと髪と皿を黒くしろって言われても、生まれつきのもんだから無理。』

『へ!…そなんですか!…え!…?でも、ピ、ピアスは外せますよね?…?』

『ヤダ。ムリ。耳をぶつた切られても断固拒否する。』

『ええ!…?で、ですが、ジャッジメント風紀委員としては校則は守らなければ困ります。先生方々も…。』

『ああ、困つてたね。でも、何度も言われてもイヤだから。』

ここまで嫌がるとは…。

…どうしよう…。

『…んー。そうだな。初春さん可愛いし、オネガイ聞いてやらないこともないかも。』

『え!…ほんとですか!…?』

『うん 君からキスしてくれたらね 』

『…へ?…?』

そしてそのとき、それを聞いたクラスの皆が騒ぎ始め、先生たちが駆けつけなければならぬほど騒ぎが拡大してしまったのである…。

（回想終了）

「…なんですか、その殿方は。」

「女の子に対して信じられないオネガイゴトね。サイテーだわ。」
「でしょ、でしょー！初春、あんな男放つときなさい！」

「で、ですが、ピアスはー…。」

しばらく、香椎に対して白熱した議論を交わしていたが、4人の少女はやがて落ち着き始めた。

「えええ…そういうえば転校してきた殿方は2人ですかよね？もう1人はどんなんですか？」

「はあはあ…そっちの方は香椎ってヤツと違つてちゃんとしてるつて感じ。でも同じ日に転入したからなのか同じピアスしてるからなのか香椎くんと仲がいいみたい。」

「げほっ…彼はC組…隣のクラスに入りました。名前は風間 かざま 潤くじゅん んです。」

「ふう…って、あれ？うちの学校にも転入生来てなかつた？」

「ええ。その方は私のクラスに入つてきましたわ。この半端な時期に転入してくるのは珍しいから学校中噂になつてますのよ。」

「名門の常盤台ですもんね。どんな人ですか？」

「彼女は麻生 零という方です。なんというか…凛然として強かな方のようで、彼女の周りに多くの女生徒に囲まれておりましたわ。おかげで私は挨拶もできなかつたんですの。」

「な、なんだかすごそうですね…。」

「そうね。こんな時期に転入してくるから只者じゃないでしょうけど。しつかし同じ日に転入生だなんて…すごい偶然よね。」

+++++

+++

PM3:46

第7学区???.通り

「へーーーっくしょい!!」

「うわーーびっくりしたーー。すげーくしゃみだな。風邪か?」

「ワリイワリイ。誰が俺のこと噂でもしてんのかね?」

「それが本当ならあんたは毎日くしゃみしてると想ひすぎだね。臯月。

「そりゃそうだ。んで?常盤台はびうだつた、零。」

「…いかにもお嬢様学校つて感じ…。漫画みたいで…やつぱり性こ
合わないね。あたしもそつちに転入したかったなー。」

「ダメだら…。で、会えたか?『超電磁砲』と。」

「ゼーんぜん。今日は女の子に囲まれて身動きも取れなかつたよ。
データはあるんだけどねー。ごめんね?潤。」

「いや、別に。つーか顔が謝つてないぞ。笑いながら謝られても意
味ないし。」

「まーまー、おしゃべりはここまでにして…俺はそろそろ『家』に
帰つて『お片付け』始めたけど?」

「解つてるつて。」

「そんじや、あそこのデーターナツを食べてから『家』に帰ろつか。」

+++
+++
+++

PM5:08

月神聖が住むマンションの玄関前

「の口、聖は仕事の区切りをつけたのかお休みをとつていた。」

当麻は聖の顔を見に行くべからほいだり…と思つてやつてきたのだ。

しかし、思つていたよりも疲れている様子なので、軽食にハチミツレモンとお粥を作つて食べさせたら、電池が切れたかのようにぱつぱつと倒れて眠つてしまつた。

このまま寝させるわけにはいかないので彼女をベッドに入れて、家に鍵をかけてからポストに入れた。

「つたぐ、無茶しそぎだつづーの。」

あいつらしげに、心配する方の身もなつてくれよなー。
…今度会つたら言つといつかな?…「ーん、それでも無茶しそうだな。

なんだつて聖は命を重んずるヤツだから。

急患がでたら全力で駆け込める。医者としては立派だと思つが、いつも駆け込んで倒れるのであれば周りが心配する。
もちろん、俺も。

どん!

「うわ!…」

「わああああ!…?」

どしゃーーー。

考え方事に没頭してたから、田の前に近づいて来た男に気づけなかつたらしい。

当麻はよろける程度に済んだが、ぶつかつてしまつた男は派手に転んでおり、男が持つていたらしい資料らしきレポートや本もあちこち散らばつていた。

「うわあ……すんませんすんません！考え方して……大丈夫ですか！？」

「大丈夫です大丈夫です！申し訳ありませんがレポート……じゃなくて！紙、集めるの手伝つて下さいませんか！？？」

「もちろんです！」

（（紙が風で飛ばされたら大変だ！））

2人は風で飛ばされないように早く散らばつた紙をかき集めた。そのとき当麻はちらつとかき集めた1枚の紙の内容を見る。どうやら外国語で書かれてあるようで読めないが、グルッと円が描いてあって中には二角や四角…読めない文字も書かれてある。まるでゲームに出てくる魔法陣のよつな…

魔法…？

「ふー、ありがとうございます。助かりました。すみません、俺の不注意でぶつかってしまつて…。」

「あーい、いえ、俺の方こそ！はい、出来る限り集めました。俺が見た限りこれで全部ですが…。」

男は当麻が集めた紙を受け取つて、集めた紙の枚数を数えていた。

「うん！全部そろつてる！本当にありがとうございます！」

「良かつたです。あー…そのつかぬ事お聞きしますが、それは？」

「え？これですか？」

じくじくと当麻は縦に首を振る。

自慢ではないが何故かそちら側との関わりを持つている。

そして、もしインデックスを狙う魔術師の1人が目の前にいる男だったら、早急に手を下すしかない。

「皿巻じゃないけど俺、17歳で一応大学生なんです。考古学が専門ですので…。結構、膨大な量ですから毎日勉強しておかないと遅れてしまうんですよ。あ、それからこれは西洋文化に関する資料本です。今回のレポートの課題はオカルトに関する事なんですよ。」

レポートはまだ途中だけどね。と笑った。

どうやら魔術師じゃないらしい。良かつた…。

…つて

「だいがくせいいいいいいいいいいい…？」

「わあ…？」

当麻が大きな声で出してしまったため男は驚かしてしまった。周りの人も当麻を見ている。視線が痛い…。

「わ、悪い。え？ほ、ホントに？17歳なんですか？てか17歳で大学生になれるもんですか？」

「なれますよ。君の目の前にいるじゃないですか。そりや日本じゃ飛び級できないけど、俺は留学生でもあるから日本の大学の講義は受けられますよ。」

「留学生？外から来たんですか？…てことは能力は…。」

「はい。一時的に滞在するだけだから持つてないです。しかも学園都市に来たのは最近なので、道が迷路みたいで解らないんですよ。困りますよね…。」

「えと…じゃあ良かつたら俺が案内しましょつか？」

「え？本当に！？いや、助かるけども…！えと…いいのかな？」

「俺でよければ構いませんよ。」

「ありがとうございます！えーと君は…？」

「あ、上条 当麻です。」

「あ、敬語はいいですよ。これからも会うんだですから堅苦しこ」と
はナシにしませんか？俺は皇 雷河。よろしくね、当麻。」

「やつか、じゃあお言葉に甘えて…。なんか中国人っぽい名前だな。

よろしく、雷河。」

「中国人ですよ。」

互いに握手を交わした。

そして当麻は学園都市について色々な話をすると、ふと疑問に思つたことを言つた。

「日本に来たばっかってワリには日本語つまこよな。」

「そうですね。実は子どものころ日本に住んでたんですね。そのとき仲が良かつた友達から日本語を教えてもらつたんですよ。おかげで日常生活で差し支えがないほど上手になつたと思います。」

「へー。その友達つて雷河のことすぐ好きだつたんだな。じゃなあや日本語を教えるなんてそんな難しい事できないよなー。」

何気なく言つたが、当麻を見る雷河の視線の感じがふと変わつた気がした。

まるで泣きたくなるような、でも嬉しいようなそんな複雑な感情が顔に出ていた。

でもそれは一瞬の事で、あとはもういつも通りの表情に戻つていた。

「そうですね。そうだといいです。俺も彼のことが大好きだった。」

「そつか。」

(ん？大好きだった…？なんで過去形？)

「うわ！？もうこんな時間？すみません。このあと用事があります

のでこれで失礼しますね。」

「お、おひ。じゃ、またなー。」

（まあ、大した意味じやないだろ。）

そう思いながら、当麻は帰りを待つ1人の少女がいる自分の家に向かって歩いていった。

雷河は帰つていく当麻の背が小さくなるまで見つめていた。

「…本当に悲れてしまつたんだな、当麻。」

寂しく、悲しく呟いて

「でも聖が言つていた通りだ。記憶を失つても君は何も変わつていい。君は君のままなんだな。」

変わらない友達に本当に嬉しく思つていた。

「わい、アイシラム』おヒヅカ』始めてるから、いつせも早くやれなことな。」

そして

「当麻は渡さないよ。アレイスター＝クロウリー。」

窓のないビルを見ながらそうつぶつた。

必然的な出会い？（後書き）

聖「雷河？どうしたんだ？君から電話してくるなんて。」

雷河「当麻に会つた。」

聖「やつーとかよ。んで、どうだつた？」

雷河「君が言つてた通りだつた。当麻は当麻のままだつたよ。」

聖「だろ？」

雷河「あはは…。」れじや学校で待ち伏せとか付いていく必要はなかつたみたいだな。」

聖「…そんな事してたのかよ…。（ストーカーじゃん。）」

人物紹介（前書き）

折角ですのでイラストも描きました。
文章だけでは人物をイメージしにくいと思ったので、下手ですが差し支えがなければどうぞ。

人物紹介

> i 14417—2002 <

名前：月神 聖

年齢：16歳

身長：166cm

体重：「教えねーぞ。」

絶世の美女だが男勝りで正義感のある当麻の幼馴染。

10歳で外の大学で首位で卒業し、14歳で医師免許を取った医学界の天才児。

彼女は当麻の幼馴染以上恋人未満。けど、お互い恋愛感情はないので恋人同士にはならない。そんな不思議な関係です。

けど性別に関係なく対等に付き合える関係はそうそうないんじやないかな。

道は違えても、心は同じところにある。そんな感じが欲しくて彼女が生まれました。

結果、何故か絶世の美女なのに男勝りという不思議な設定がついてしまいました（笑）

なんてこつたい（笑）

> i 14418—2002 <

名前：香椎 皐月

年齢：13歳

身長：163cm

体重：「ノーコメント。」

桜川中学校に来た謎の転入生。

黒みの縁髪にエメラルドグリーンの瞳をもつた田立つ風貌をしている。

両耳に赤やオレンジのガラス玉（？）の飾りがついたリング状のシリバーのピアスをつけてる。

彼は今の世で言うとチャラ男？だと思います。

まだ謎が多い人物の一人ですので、あまり書く事はないですね。

まあ、13歳で女の子にキスを求める変態男だと思ってやって下さい（笑）

13歳でキスなんてあるのかな…？どうだ？？

人物紹介（後書き）

他の人物も後ほど描きます。
もうしばらくお待ちください。

挿絵は…どうしようかな…?

あつた方が良いのか、ない方が良いのか解らないので感想をお待ち
しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5186o/>

とある天才の幼馴染

2010年12月5日00時39分発行